



称名寺の本堂が鍛冶場！

豊臣秀吉による朝鮮出兵は天正二十年（一五九二年）に始まり、秀次に対し、その配下の大名たちに造船にあたるよう指示しています。

それをうけて、当時、岡崎城主を務めていた田中吉政は、朝鮮出兵の大船の建造を命じ、称名寺の境内で大船が造られました。その際、本堂が鍛冶場として活用されたそうです。大規模な事業だったことがうかがえるエピソードです。

では、なぜ、称名寺で朝鮮出兵の船の造船が行われたのでしょうか？当時の大浜地区は港町として大きく栄えていたからだと考えられます。問丸と呼ばれる物資の保管、輸送や取引の仲介にあたった組織があったのは、日本でも数か所であり、大浜はそのうちのひとつだったのです。

造船に関するほかのエピソードとして、岡崎市にある犬頭神社には、岡崎城主田中吉政によって大杉が切り倒され、大浜にて船の材料にされたと伝えられていたり、篠島では大浜で建造された軍船に篠島の人々が乗って、朝鮮まで行ったと伝わっています。

三英傑へきなんの公式 Instagram (@hekinan_saneiketsu) では、碧南市と三英傑に関する情報を随時掲載しています。



称名寺の境内
大浜てらまち案内人が、豊臣秀吉に関する軍船造船のエピソードを伝えています。



朝鮮出兵に使われた安宅船模型
(佐賀県立名護屋城博物館所蔵)

碧南の歴史へのいざない

問 文化財課内市史資料調査室 41-4566

No.102 水辺の記憶(1) 渡し舟で油ヶ淵を渡る

油ヶ淵は碧南、安城市に囲まれた、面積では県下第二、海水と淡水が混ざる県内唯一の天然湖沼です。

『鷲塚小学校の百年』に、明治、大正から昭和初期の遠足の思い出として、「東端へ油がふちを渡し舟でわたって桃の花見にいった。」という一文があります。

江戸時代、明和元年（一七六四）に西端の領主本多忠栄は伏見奉行に任せられると、村に桃の苗木を送り宅地に植えさせました。明治五年（一八七二）に畑に果樹を植えることが解禁され、桃の木は一気に広がりました。

明治二十七年（一八九四）発行『碧海郡地理歴史』には、東端・西端両村には多くの桃が植栽され、花の季節になると見渡す限り紅の雲のようで素晴らしい景色であると記されています。続いて、「油ヶ淵を渡りて新川町に上陸す」とあるので、船で渡るイメージです。

『近藤坦平物語』（碧南市史料別巻四）の中でも、明治二十一年（一八八八）のこととして、鷲塚で開業医をしていた坦平が一家でしゃもじ池の船着き場から船に乗って油ヶ淵

を渡り、西端の蓮如さんに出かける場面があります。

この「西端の蓮如さん」とは、西端の応仁寺で行われている浄土真宗本願寺第八世蓮如（一四一五～九九）をしのぶ法要のことです。ここにはいろいろな店が出て娯楽の場でもありました。

両村共、多く桃を栽う。花の候に及べど、一望紅雲の如く、風光愛すべし。予の南方は湖あり、油ヶ淵といふ。東西二町餘、南北十八町餘あり。周囲二里許あり。此湖古く海中の深潭なり。漸く海潮の遠くに随ひ、遂に變じて湖となり。其水西南に流きて、新川町に至り、海に注ぐ。之を新川といふ。舟運の便少なからむ。油ヶ淵を渡りて、新川町に上陸す。新川町、西南

『碧海郡地理歴史』▷ (明治27年発行)

※5行目の油ヶ淵成立の説明の補足：慶長10年（1605）に矢作川河口が付け替えられ、土砂が堆積し、数十年後には、米津・鷲塚間に堤防が築かれたために三河湾の入り江「北浦」が湖沼となりました。